

第十八章 機構の改變

一 役員の増強

社長山崎信興は大正八年一月就任以來、凡そ十七年間、政界の激動と、國際狀勢の急變に直面しながら、よく丸善の社務を統率し、その發展に寄与して來たが、漸く老境に入り、しかも病床に親しむことが多くなったので、社長に代つて社務を總括すべき副社長設置の必要にせまられた。そこで昭和十一年二月二十四日職制を改め、社長の下に副社長一名、常務取締役三名以内を選定し、都合によつて副社長を任命しない時には、その代りとして取締役中から専務取締役一名を任命することを定めた。この規定により、取締役金沢末吉が新たに副社長に就任、八田庄治、荒川実が常務取締役に就任し、金原巳三郎が監査役から取締役にまわつてその空席を埋めた。しかしこのため、昭和十二年十二月一日付で川村善之助が監査役に新任されるまでは、小柳津宗吾ただ一人で監査役の重責を荷つていた。この間山崎社長の病状は次第に悪化し、到底社長の椅子に止まることが不可能となつたのでその職を辞し、これに代つて副社長の金沢末吉が昇格して社長に就任し、常務取締役荒川実が専務取締役に就き、当分副社長を置かないことにした。山崎信興は辞任と同時に推されて相談役となつたが、在職わずかに三か月、十二年六月十四日に死去した。

因に新たに社長に撰ばれた金沢末吉は、慶応元年一月十一日岐阜県恵那郡岩村に金沢林平の四男として生れ、明治十一年十一月横浜丸屋薬店入社、のち細流社に移り次いでその経営下に入った横浜丸屋書店の経営を担当。二十一年五月唐物店の横浜出張所に転じ、この間朝鮮へ出張、唐物の販売に従事したが、三十年一月丸善大阪出張所に転勤、その後主任を経て、同出張所の支店昇格により支店長となった。三十三年七月東京本社に転じ、書籍部出版主任兼地方販売課主任、本店改築主任を歴任して四十一年一月取締役就任、調査部長を兼任、大正九年より昭和四年頃まで横浜支店監督、大阪支店監督の要職に就き、山崎社長老齢病弱の爲補佐として昭和十一年三月一日取締役副社長に、次いで十二年三月十五日第六代社長に選ばれた。



金沢末吉（六代社長）

丸善は昭和初期に入ってから、震災の傷痕も全く癒え、旧に倍する業績を挙げていたが、資本金は大正九年三三〇万円に増資されたまま据置かれていたので、昭和十一年九月、更に一七〇万円を増資し、資本金五〇〇万円に改め、将来の発展に対処する裏付を行った。他方業務が益々多忙を極めるようになったので、役員の改選がしきりに行われた。すなわち、昭和十五年二月二十四日取締役三名を増員することが決議され、選挙の結果、監査役小柳津宗吾、本店支配人伊藤四良及び山崎民雄が新たに取締役に当選就任し、これで取締役は八名となった。次いで同年八月二十四日取締役金原巳三郎が辞任したので、これを補充すると同時に事変の進展に伴い各部

門共頗る繁忙となったので更に二名を増員し、新たに金原金二、本店支配人野口三郎及び司忠が当選就任して、取締役は都合十名を数うるに至った。そのうち鈴木仁一郎を除き、他は皆常務取締役として各部門に属する業務を分担した。

金原巳三郎は金原明善の養孫に当り、金原銀行創立後その経営に従ったが、明治三十九年丸善の監査役となった。のち昭和十一年二月二十四日取締役に就任したが、一身上の都合により取締役を辞任した。辞任後も当分相談役として尽瘁したが、昭和十八年一月十六日七十五歳をもって死去した。

金原金二は金原巳三郎の養子で、東京帝国大学を卒業して金原銀行に入り、後に同銀行の取締役に就任、同銀行が三菱銀行に買収されたのでここを辞し、昭和十五年八月二十四日丸善の取締役に選任された。

山崎民雄は前社長山崎信興の養子で、明治三十九年入社。爾来永らく洋書仕入に従事、商品課、審査課長を歴任した後本店支配人となり、同十五年二月二十四日取締役に就任した。

野口三郎は明治二十一年五月一日茨城県鹿島郡大同村に生れ、明治四十一年入社、主として洋品・雑貨の仕入販売業務に従事し、昭和十四年三月本店支配人となり、同十五年八月二十四日取締役に就任した。

昭和十八年二月二十四日鈴木仁一郎は取締役を辞任した。

金沢末吉が社長に就任したのは昭和十二年三月のことで、時宛も日華事変勃発に遭遇し、次いで太平洋戦争となつて社業は益々煩雜多岐を極め、会社の経営に於ても実に容易ならざるものがあった。この間に処し、金沢社長は常に献身的努力を傾注し、度重なる苦難に堪え、幾多の難関を克服し、よく社業の発展を図り、当社の基礎を確立

した。ところが昭和十八年三月一日老齡の故に社長を辞し同時に会長に就任した。そこで専務取締役荒川実が同日附を以て社長に就任した。

なお新社長荒川実の略歴は次の通りである。

明治十一年一月五日兵庫県出石町に生れ、第一高等学校中退後三十年九月二十日入社、主として洋書、外国雑誌の仕入販売に従事、三十二年外国雑誌を出版社から直接顧客に送付する方法を案出しこれを実施させて大いに好評を博した。大正二年書籍部長を経て、同八年一月二十四日取締役に就任、昭和十一年二月二十四日常務取締役、十二年三月十五日専務取締役を経て十八年三月一日社長就任凡そ四年有余社長の業務に従事して、国家存亡の折、よく社業を守って終戦を迎えた。

一方監査役についてみると監査役小柳津宗吾及川村善之助の任期満了により、昭和十五年二月二十四日小柳津宗吾は取締役に就任したので、川村善之助が再任、他に村上英四郎、中村泰が新たに監査役に当選して就任した。

昭和十九年二月八日川村善之助が老齡のため辞任し、監査役は適当な後任がなかったので、村上英四郎及中村泰の二名となった。



荒川実（七代社長）

二 付属機関の改変

さて本社は増資と共に業務の拡張を行い全国の主要な都市に支店・出張所を新設し、また既設のものの昇格・改築等を実施したが、この頃に於ける支店・出張所の状況は次表の通りである。

支店・出張所名	所在地	年月日	備考
福岡支店	福岡市上西町	大二年九月十日	開店
仙台支店	仙台市国分町一六八	大五年二月一日	開店
大阪支店	大阪市東区博労町四の一四	大十年十一月二六日	新築開店
早稲田出張所	牛込区早稲田鶴巻町四四〇	大十五年十一月六日	株式会社早稲田大学出版部より買取
横浜支店	横浜市中区弁天通二の二八 (昭三年中区弁天通二の三四に表示変更)	昭二年十二月十一日	改築
名古屋支店	名古屋市中区栄町三の五	昭八年三月十五日	新築開店
台北出張所	台北市本町通台北ビル内	昭九年二月	大阪支店所管
日吉出張所	神奈川県横浜郡日吉村矢上一本松四六八 (横浜市神奈川区日吉町四六八に表示変更)	昭十年四月八日	慶応義塾予科移転に伴い開設
京城支店	京城府本町二丁目	昭十一年十月一日	出張所より昇格
神戸支店	神戸市明石町三一	昭十一年十一月一日	出張所より昇格
札幌支店	札幌市北三条西三丁目大同生命館内	昭十二年四月一日	出張所より昇格
長崎出張所	長崎市鍛冶町乙一四一	昭十四年四月一日	新設

新 京 出 張 所	新 京 特 別 市 梅 ヶ 枝 町 一 丁 目 一 二 一 一	昭 十 五 年 四 月 三 日	新 設
新 京 海 上 ビ ル 売 店	〃 大 同 大 街 三 〇 二 東 京 海 上 ビ ル 一 階	昭 十 五 年 四 月 三 日	新 設
新 京 豊 樂 路 売 店	〃 大 同 区 豊 樂 路 二 一 一	昭 十 五 年 四 月 三 日	新 設
京 都 支 店	京 都 市 中 京 区 河 原 町 通 蛸 薬 師	昭 十 五 年 十 月 十 日	新 築 開 店

此の外、設備の拡充・新設には、

駒 込 工 場	本 郷 区 駒 込 林 町 八 二	大 五 年 一 月 三 十 一 日	丸 善 直 営 工 場 と なる
日 暮 里 工 場	荒 川 区 日 暮 里 町 三 の 七 七 七	大 十 二 年 一 月 十 四 日	新 設 大 正 五 年 買 収 の 巢 鴨 松
荏 原 工 場	荏 原 区 中 延 町 一、〇〇四	昭 十 三 年 十 二 月	花 園 製 墨 所 も 移 転
昭 和 別 館	日 本 橋 区 江 戸 橋 三 の 二	昭 十 四 年 十 一 月	既 設 々 備 買 収
淡 路 町 寄 宿 舎	神 田 区 淡 路 町 二 の 五 の 三	昭 十 五 年 七 月	新 築
奉 天 イ ン キ 工 場	奉 天 市 敷 島 区 八 幡 町 一	昭 十 七 年 春	新 築
九 段 寄 宿 舎	麹 町 区 九 段 一 の 一 四	昭 十 七 年 九 月 三 十 日	新 設
			十 九 年 二 月 十 八 日 売 却

があり、爾後の発展に備えた。

尚、参考のためこれらの施設の中、重立ったものの規模並びに業態について略述しておこう。

横 浜 支 店 曾ては横浜商業の中心街として名実共に第一等地であった支店所在地弁天通りも大正十二年の関東大震災を契機として、その繁華は漸次伊勢佐木町通りに移り、商店街としての価値を失うようになったので、当支店の業態も寧ろ足踏み状態に終始する期間を経過した。昭和十年更生策として外売に重点を置くことにし

たので業態は一転し、漸く向上を示すに至った。昭和十七年六月一日、日吉出張所を当支店に移管、ひたすら業務の拡大強化に努め学校官衙は素より戦争の為急激に興隆した県下工業地帯に広く外壳網を張ったため、業績は急速な進展を遂げ、十八年度前期は当支店開設以来の最高成績を示すに至った。

名古屋支店

名古屋は周知の如く、東京・京都の中間に位し、東海道の要衝として早くから知られていた。徳川が三親藩の一つをここに置いて、四隣の大名たちを牽制せしめたのも宜なる哉である。従って此の地方に於ける文化の中心をなしたが、こうした政情はいつの間にか容易に他国者よそものを受け入れないという根強い伝統をつくってしまっていた。このため丸善が中京商人に伍して、その堅い地盤に楔を打ち込んで行くことも、当事者にとっでは大変な仕事であった。司忠 現会長が、昭和四年大阪支店の販売課長から抜擢されて名古屋支店長に栄転した時の悲壮な心情を自著「学燈をかかげて」の中に克明に記している。

——軌道に乗ったばかりの販売の仕事がおもしろくて、再三固辞したのだが、排他的で有名だった名古屋への切込役として、負けん気の強い私にどうしてもいうことで、白羽の矢が立ったのだ。

気が進まなかったが、社命となれば致し方がない。若い私は、至るところに青山ありとばかりに乗り込んでいった。

当時はどこの会社でも、名古屋支店長が無事つとまれば、出世はまず間違いないといわれたほど、よそから

進出することのむずかしい土地柄であった。名古屋の人には失礼な言い方だが、ほんとうのことなのでご勘弁願いたい。

着任してみれば、なるほど噂にたがわず他所者には冷たいところである。なにしろ松坂屋のことを伊藤さんといっている時代のことだから、無理もないわけだ。

しかし、排他的といってみても、ことばを置きかえてみれば、それだけ郷土愛が強いともいえるわけだ。先方がそうなら、こっちにも『住めば都』という順応性もあろうというものだ。

その土地の発展を考えて仕事を進めて行くのに、サヤ当ての起きようはずはない。簡単な算術であったが、そう考えて、大いに気が軽くなった。あとは具体的に事を運ぶだけである。

私は名古屋の文化的な後進性を思って、この面から名古屋の発展につくすことを考えてみることにした。丸善としては社業にマッチした、それこそ望むところの役割である。

私は保守的といわれる名古屋で、沈滞していた洋画壇の振興からその仕事を始めることにした。及ばずながらこの地方に在住する画家の諸君にはできるだけの援助をした。

身銭を切って絵を買ったし、展覧会も頻繁に開いて、名古屋人の文化開眼に努力した。またジャーナリズムや大学教授など各方面の方々にも親しく交際していただき、地元の発展と共存しようとする私の意のあるところを説いて回った。(略)誠意はいつか認められるものである。私のやり方はだんだん地元の人々の心をやわらげ、やがて支持をいただくようになって、仕事はしだいに軌道に乗るようになった。心配された支店の敷

地買収なども無事に進んで、四年目の昭和八年三月には市内繁華街に鉄筋コンクリート四階建の新しい支店を建設することもできた。(略)のちに私の東京本社への転任が決まったときには、土地の文化人や新聞人の代表が本社に押しかけて、留任運動をしてくれるという騒ぎになった。土地柄からいってまことに破天荒な出来事というべきで、私としては、はなはだくすぐったい成行きになってしまったが、内心はさすがにうれしかった。

司支店長の開拓者精神もさることながら、丸善好みの特製洋品類は、市民インテリ階級の趣向に投じ、殊に昭和八年に当支店の本館が、中京繁華街の中枢に出現するや、俄然各商品の売上高は倍増し、他の百貨店や専門店の業績を凌駕する成果を収めた。

京 城 支 店

丸善が京城へ進出したのは、昭和五年六月二十日京城府黄金町一ノ一六七に出張所を開設した時に始まる。その後昭和十一年十月一日、出張所から支店に昇格した京城支店は、本町二丁目に店舗を設け、支店長諏訪多房之助以下約五十名の社員をもって開店し、わが国の前進基地である朝鮮の文化興隆の一翼を担った。

この開店については次のような話がある。大正の終りから昭和初期にかけて、丸善の古い顧客の大沢勝氏が細菌学の教授として京城大学に教鞭をとっておられた。そのころは京城には丸善の駐在所があるだけで所員が時々大学に出掛け、洋書の注文を受けていた。これが定期的でなかったので大学の方でも不便を感じていた。そこで大沢教

授はその頃京城駐在所を監督していた昔馴染の司忠 現会長と相談して、恒久的な施設を置くように話を進めたが、さてその場所を何処にするかということでハタとつまり、結局、同教授が学生課長を兼務していたのを好機に、このうちの空き部屋を提供して売店を開かせたという。つまり丸善は最初に京城大学構内に売店を開き、これが本社の拡張政策に従って、京城出張所開設となり、大学構内から外に進出し、更に支店に昇格するようになったというのである。これは同教授の実話であるから、時間に多少のズレはあっても大綱に誤りがあるとは考えられない。

ところが開店の翌年に日華事変が起り、軍事輸送優先のため一般貨物の取り扱いが一時不円滑になり、営業上相当の打撃をうけたが、それも短期間の一時的な現象で、輸送の障害が解消されると俄に活気を呈した。更に十五年末には朝鮮總督府の配慮を得て、洋書の輸入も可能になり、営業状況も好転し、従業員数も百余名を数うる大世帯になった。そこで開店後二、三年で店舗の狭隘を感じるようになったので、本館裏手の空地に一一五・五平方メートルの総三階建コンクリート煉瓦建の店舗を増築することになり、十六年九月に竣工し、一偉容を加えた。

神戸 支店 京城出張所の支店昇格一か月後の十一年十一月一日、大阪支店に所属していた神戸出張所が、これから離れて神戸支店になった。神戸地域には、学校や会社が多いので洋書類の需要が多かったが、日華事変勃発に伴い軍需会社が急速に増加し、工業地帯は漸時西播州方面に拡張されて行った。このため十五年八月には姫路市綿町へ神戸支店出張員詰所を新設し、又、三の宮一番地に別館を設けて顧客の便宜を計り、販路を益々拡大して行った。そのなかで販売高の最高を示したものは、勿論軍需会社に必要なタイムレコーダー、計算機等であっ

た。

新京出張所

日華事変の申し子ともいふべき新京出張所は、それだけに事変色豊かなものであった。即ち満州国誕生と同時に、丸善でもこの地方への進出は充分計算されていたが、事変勃発と共に軍需工業が急速に振興し、これに伴い洋書の売行が目覚ましく、到底本社ではその需要に応じ切れなくなったので、満州国内で営業を始め、満州国外国為替許可を得て、シベリア鉄道經由で、主としてドイツの書籍・雑誌を新京出張所に輸入する方法をとることにした。そこで十五年四月三日新京特別市梅ヶ枝町に新京出張所を設け、その売店を大同大街にある東京海上ビルの一階及び豊樂路に開いた。

出張所の規模は、一、二階が事務室、別に二棟の社宅があり、海上ビル売店は、一階二室が書籍・文房具・化粧品、三階に倉庫一室を設けた。また豊樂路売店の方は、一階一室が書籍・文房具類の売場、地下室を倉庫に当てた。かくて四囲の状況から余儀なく三個所に分れて業務を行ったが、それにも拘わらず商況は頓に活発になっていった。

次に新たに開設した施設のうち、荏原工場が坂斉栄三郎の事業を継承したことは既述の通りであるが、更にこれを詳述すると、東京市荏原区（現品川区）中延町一、〇〇四番地所在の合名会社坂斉万年筆製作所の事業を継承したのは、昭和十三年三月二十二日のことであった。次いで同年十二月に遺嗣坂斉栄一からこれを買取り、本社直

営の丸善荏原工場として発足し、丸善アテナ万年筆を専門に製造した。建物の規模は、木造トタン葺二階建一棟と、木造トタン葺平家一棟で、本屋の一階（五〇坪）を作業場に、二階（四五坪）を寄宿所に、附属家屋（七坪）を物置に当てた。操業開始当時の従業員は、事務員四名、工員二十八名の小規模であったが、それでも製造能力は昭和十三年は九か月間に四、三六六打^{ダース}に達し、その後設備の改善に伴い順次業績を挙げて行った。

昭和別館

昭和別館は、本社と指呼のうちにある日本橋区江戸橋三ノ二にあり、昭和十四年六月十五日起工、同年十一月十五日に落成した外壁無筋コンクリート造木骨スレート葺二階建、延坪数一一八坪余のものであった。別館を設けた理由は、日華事変勃発後洋書輸入がやや渋滞する傾向を見せ始めたので、逸早く重点を和書の仕入販売に切り替えた。尤も従来和書仕入課は本社に設けられていたが、各支店も個々に仕入れを行っていたので、統制の不備を補って、総合仕入れを行わんとし、更に卸部をも設けて業務の大拡張を企図した。このため十数名の課員を凡そ三倍強の五十数名に増員したから、これまでの第二別館では愈々狭隘を感じたので、更に別館を新築することにした。これが所謂昭和別館であり、和書仕入課がここに移り、十四年末から業務を開始した。

また後述のように従来繊維製品等洋物を取り扱っていた洋物卸部を本社の業務から分離し、十五年八月一日株式会社丸善洋物卸店として独立せしめたが、依然として本社内で一般業務を行っていた。そこで十六年三月昭和別館の南側に接続して、略同様の規模を持った一棟を増築し、丸善洋物卸店と、丸善商事株式会社の二社がこれに移って業務をつづけた。

淡路町寄宿舎

田端寄宿舎は昭和八年三月に閉鎖され、爾後これに準ずる施設も開かれないままに過して来たが、日華事変直前の頃から急に社員が増加し、その中には寄寓先のないものも多かったので、神田区（現千代田区）淡路町二ノ五ノ三所在のインキ部の建物に二階を増築し、これを宿泊所に当てることにした。そこで十四年十月二十七日に起工、翌十五年七月末竣工、直ちに所要の社員をこれに收容し急場を凌いだ。

九段寄宿舎

この淡路町の寄宿舎も業務の拡大及び応召・徴用による社員不足を補うために新たに募集した社員を收容するには狭隘となったので、昭和十七年九月三十日麹町区九段一の一四に木造瓦葺二階建の寄宿舎を新築、淡路町宿舎の社員をこゝに移した。

しかし戦局の激化に伴い寄宿生も応召・徴用される者が多くなり一方業務も縮少されたため九段の寄宿舎もその存在価値が少なくなった。よって昭和十九年二月十八日運輸通信省にこれを譲渡した。